

《新刊紹介》

野地潤家著

『わが心のうちなる歌碑Ⅱ』

「わが心のうちなる歌碑」と題する覚えがきを、畏友下郡峯生兄にすめられて、兄の主筆する「歌帖」誌に寄せるようになってから、すでに一七年を経た。その間、昭和四八年（一九七三）から昭和五三年（一九七八）にかけて「歌帖」誌に掲載された三六編を、「わが心のうちなる歌碑」として、昭和五五年（一九八〇）一月、桜楓社から刊行することができた。（まえがき）

本書は、この「わが心のうちなる歌碑」の刊行から十年を経た平成二年、その続編として編まれたものである。収録されているのは、昭和五四年（一九七九）から昭和六〇年（一九八五）にかけて、同じく「歌帖」誌に掲載された三六編である。

覚えがきの対象としては、縁あって出

会うことのできた、一首の歌、一冊の歌集、一人の歌人を取りあげた。出会いそのものは、えにし、つながり、それぞれ濃淡があつて一様ではないが、一首ごとの内界、歌集ごとの世界、歌人ごとの境涯に接して、そこに分け入っていく営みは、絶えず緊張感を伴い、また読み味わう喜びをもたらすものであつた。（まえがき）

歌人の場合には、生家やその記念館など

を著者自身が訪れ、またエピソードや作品からその人生を浮き彫りにしている。

その歌の読まれた背景、歌の作者の生き様を見つめている著者の鋭い人間観察の眼を感じ取ることができた。

そこには出会いがあつた。歌との出会い、その歌を読んだ人との出会い。本書を読んだ私自身も、有意義な出会いをすることができた。

「自らのことを多く語っている。」とまえがきで述べられているが、著者自身の心を通して、様々な歌に出会えることができたことは、よろこびであつた。

（B6判 二一六ページ 平成二年九月一〇日発行 溪水社 一五四五円）

（川野 敏子）